

「終戦」の日はいつか？

—北海道の事例から「8・15終戦」史観を相対化する小学校社会科授業—

When did the Asia-Pacific War finish ?

—A record of the lesson for Elementary school students on correcting the view that the Asia-Pacific War finished on August 15th focusing on the cases of Hokkaido—

大 谷 伸 治*

Shinji OHTANI*

要 旨

“「終戦」の日はいつか？” —この問いに、多くの日本人は8月15日と答えるだろう。昭和天皇がラジオ放送（玉音放送）でポツダム宣言受諾の旨を国民に伝えた日であり、現在「終戦記念日」とされているからだ。しかし、玉音放送をもって終戦と捉える見方（「8・15終戦」史観）は正確ではない。第一に、ソ連参戦により、8月15日後にも戦闘があった地域が存在を忘却している。第二に、8月15日は国際法的に終戦といえない。ポツダム宣言受諾の旨を連合国に通告したのは8月14日。正式に降伏文書に調印したのは9月2日である。高校日本史教科書はおおむねその点を正確に記述しているものの、小中学校教科書は学び舎を除き「8・15終戦」を採用しており、小中学校の段階で「8・15終戦」史観を再生産してしまう現状がある。そのため、小学校から「8・15終戦」史観を相対化する授業が必要だと考え、樺太・千島戦など北海道の事例を教材化し実践を試みた。

キーワード：「8・15終戦」史観、玉音放送、玉音写真、樺太・千島戦、降伏文書調印

1. 問題の所在

“終戦の日はいつか？” —この問いに、多くの日本人は8月15日と答えるだろう。昭和天皇がラジオ放送（以下、玉音放送）で、ポツダム宣言受諾を国民に伝えた日であり、現在「終戦記念日」とされているからだ。このように玉音放送をもって終戦と捉える見方を、本稿では「8・15終戦」史観と呼ぶ。「8・15終戦」は、事実の忘却のもとに創られた「記憶」だからである。

第一に、ソ連参戦によって、8月15日以後にも戦闘があった地域が存在を忘却している。

第二に、8月15日は国際法的に終戦といえない。ポツダム宣言受諾の旨を連合国に通告したのは前日14日。終戦詔書の日付も同日である。正式に降伏文書に調印したのは9月2日であり、世界的にはこの日が対日戦勝記念日である。日本でも当初は8月14日や9月2日を終戦と捉える言説が見られたが、1955

年には8月15日に一本化される。現在、8月15日は「終戦記念日」として政府主催の全国戦没者追悼式が開催されているが、この実施要項を閣議決定したのは1963年¹⁾、正式名称「戦没者を追悼し平和を祈念する日」を閣議決定したのは1982年である。

このように「8・15終戦」史観は、8月14日や9月2日という「敗戦」を思い起こさせる日を忘却し、天皇の「聖断」による「終戦」が国民に伝えられた8月15日を重視する「記憶」である。この定着過程や玉音報道・写真の作為性を明らかにしたのが佐藤卓己氏である²⁾。以降、共同研究が進められ、東アジアや欧米での終戦認識の多様性が明らかになってきた³⁾。

現行社会科教科書での「終戦」日は、小中学校は学び舎を除き8月15日、高校はおおむね9月2日で、佐藤氏の研究が公表された当時とさほど変わらない。

一方で、玉音写真を掲載する教科書が増えており、近年の研究を反映するどころか逆行している。佐藤書が出版された当時の最新教科書（2002年）では、玉

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

音写真を掲載したのは、2冊のみ（小学校・光村図書、中学校・帝国書院）で、それを受けて氏は「教科書での「玉音写真」掲載は例外的といっても過言ではない⁴⁾」としていた。しかし、現行では9冊に増えた⁵⁾。しかも、これらの写真には、佐藤氏が玉音放送の瞬間ではなく、その後に続いた政府告諭などが終わった12時半頃に撮影されたものだろうと指摘した⁶⁾、正座で泣いている姿や頭を垂れている姿を写したものもある⁷⁾。

いくら高校が正確でも、小中学校がいまだに「8・15終戦」で、玉音写真掲載が増加しているならば、「8・15終戦」史観を再生産してしまう状況が強まっているといえる。よって、小学校から「8・15終戦」史観を相対化する必要があると考え、北海道新聞が掲載した作為された玉音写真と樺太・千島戦を教材化し、2016年度札幌市立小野幌小学校6年生3学級で実践した。本稿はこの実践記録である。

2. 小学校教科書の「終戦」記述

本章では、現行小学校教科書の「終戦」記述の問題点を検討する⁸⁾。小学校の現行教科書は4社である。記述は2種類に分かれる。1つは8月15日に降伏したという記述、2つは玉音放送によって終戦したという記述である。まずは1つ目から見よう。

【東京書籍】（占有率 53.8%⁹⁾）

8月15日、日本はついに降伏し、アジア、太平洋の各地を戦場とした15年にもわたる戦争が、ようやく終わりました。同時に日本による台湾と朝鮮の植民地支配も終わりを告げました¹⁰⁾。

【光村図書】（占有率 0.6%）

これ以上戦えないと考えた日本は、1945年8月15日、アメリカやイギリスなど連合国が降伏をすすめた、ポツダム宣言を受け入れました。こうして、アジア・太平洋地域を戦場とした、15年にもおよぶ戦争が終わりました。同時に、日本による台湾と朝鮮の植民地支配も終わりを告げました¹¹⁾。

東京書籍は曖昧な記述だが、光村図書は8月15日にポツダム宣言を受諾し降伏したとする。しかし、ポツダム宣言受諾の旨を連合国に通告したのは前日14日であり、明らかな事実誤認である。この事実誤認を、半数以上の占有率をもつ東京書籍が、2000年以降改めていない¹²⁾ことは問題である。

ただ本文だけなら、その弊害はさほど大きくはない。終戦の根拠が不明確で、玉音放送と終戦はつな

がっていないからだ。むしろ、「降伏」という言葉で、「終わった」（終戦）というよりも「負けた」（敗戦）という印象をいくらか抱かせるものと評価できなくもない。

しかし、東京書籍は2011年の改訂で、脱帽直立の姿を写した玉音写真「玉音放送を聞く人々」を新しく追加し、「ラジオ放送で昭和天皇の声によって戦争の終結が国民に伝えられました」と解説を付した¹³⁾。さらに「8月15日」の側註で次のように記述している。

悲惨な戦争を二度と起こさないことをちかい、平和をいのるための「終戦の日」です。この日に全国戦没者追悼式などが行われ、戦争の記憶を語りつぐため、さまざまな取り組みがなされています¹⁴⁾。

このような写真と解説、側註の追加によって、本文の事実誤認の弊害が増幅され露わとなった。第一に、8月15日はあくまで天皇が「忠良なる爾臣民」に戦争終結を伝えるという内向きの儀式に過ぎないにもかかわらず、「降伏」という事実誤認によって、同時に諸外国にも降伏を伝えた日となってしまう。つまり、玉音放送が内外に終戦を伝えたという理解に陥ってしまうのである。それゆえ第二に、8月15日が「終戦の日」であるという側註の記述を違和感なく受け入れ、戦後一貫してそうであり、諸外国でもそうであるかのような誤解を生む恐れがある。ただ、これは事実誤認だから起こることではない。2つ目の記述でも同様である。

【教育出版】（占有率 27.7%）

8月15日、昭和天皇がラジオ放送で日本の降伏を伝え、15年にわたる戦争はようやく終わりました。同時に、日本による朝鮮や台湾の支配も終わりました。また、満州にとり残され、戦争が終わってからも、長い間帰国できなかった日本人も大勢いました¹⁵⁾。

【日本文教出版】（占有率 18.0%）

日本は連合国に降伏することを決め、8月15日に、昭和天皇が、ラジオで日本の降伏を国民に伝えました。／このようにして、太平洋戦争をふくめ、多くのぎせい者を出した第二次世界大戦が終わりました。日本の植民地になっていた朝鮮や台湾、日本にせめこまれた中国や東南アジアの人々は、日本の支配から解放されました¹⁶⁾。

教育出版は、誤解を生む記述である。降伏の決定が14日であることに触れず、ラジオで伝えた対象も明記していないからである。それゆえ、1つ目の記述と同じく、15日に降伏を決定し、玉音放送で内外に伝

えたとの誤解を生む危険性を孕んでいる。

一方、日本文教出版は8月14日と明記はしていないものの、15日の前段に「日本は連合国に降伏することを決め」との記述があり、15日以前に降伏することを決めたことが曖昧ながらも理解できる。また、ラジオで伝えた対象も「国民に」と明記されており、玉音放送が内向きの儀式であることも分かる。その点では、小学校の中では最も事実に近い記述といえる。

しかし、日本文教出版は、正座で泣いている玉音写真を2005年以降掲載している。これが問題である。泣いている玉音写真は玉音放送に対する誤解を生み、「8・15終戦」史観を創り出す大きな要因だからだ。

その誤解とは、天皇による終戦詔書の朗読で国民が泣いたという誤解である。終戦詔書は漢文調で書かれている。さらに、ラジオの音質が悪く、天皇の朗読自体も流暢とは言えないものであった。だから国民は、天皇による終戦詔書の朗読だけで、漢文調の内容を理解できたわけではなく一中には事前に知っており理解できた者もいたが¹⁷⁾、多くはその後続いた放送員の解説によって理解した¹⁸⁾。したがって佐藤氏が指摘するように、この写真は玉音放送の瞬間（正午から約5分間）ではなく、その後続いた放送員の解説が終わった12時半頃に撮影されたものと推測される¹⁹⁾。さらに、小学校以来、国民儀礼の規律訓練を受けてきた国民が、玉音放送の前に「全国聴取者の皆様御起立願います」とのアナウンスや君が代の奏楽を聴けば、条件反射的に直立姿勢をとったはずであり、玉音放送の瞬間に泣き崩れたとは考えられず、あるとすれば玉音放送の後だと考えられる²⁰⁾。

しかし、この事実は忘却されている。なぜか。玉音放送が泣いている姿を写した写真とともに語られてきたからに他ならない。したがって、日本文教出版のように、「日本の降伏をラジオで聞く人たち」とのキャプションで泣いている玉音写真を掲載すれば、国民が天皇の朗読で内容を理解し泣いたという「記憶」が子どもたちの中で再生産されてしまう恐れがある。

泣いている玉音写真が引き起こす問題はこれだけではない。佐藤氏が詳細に明らかにしているが、泣いたり土下座したりしている玉音写真はすべてというわけではないが、作為されたものが多いからだ²¹⁾。作為が行われた背景には、終戦詔書の目的が関わっている。

現在の私たちは、天皇は玉音放送で「降伏」を伝えたと思いがちである。現に教育出版の本文と日本文教出版の本文とキャプションはそうである。しかし、終戦詔書を見ると、「降伏」の語はない。終戦詔書の

主たる目的は、降伏を伝えることではなかったからだ²²⁾。終戦の詔書は5つの段落から成る。最も長いのが第3段落である。ここでは、前段で戦争の目的が、後段でポツダム宣言を受諾した理由が語られる。

戦争の目的は「帝国ノ自存」と「東亜ノ安定」であって、他国を侵略する意図はなかったという。さらに注目すべきは、宣戦の対象が米英の2国のみであることだ。これは国際法的には事実である。中国とは実質上戦争状態だと認識していたが宣戦布告をせず、法的には「事変」だったからである²³⁾。かかる事情があるにしても、第4段落の冒頭には、「朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス」と、あくまで東アジア諸国を欧米の支配からの解放を共に目指す盟邦と位置づけ、アジア諸国と戦った事実を隠蔽していることには注意すべきだ。ただこの点については小学校教科書すべてに、終戦による植民地解放の記述があり、日本による植民地支配を認めている。この背景には、日本文教出版を除く3社が「15年にわたる戦争」の呼称を用いていることも関係しているだろう（日本文教出版は「太平洋戦争をふくむ第二次世界大戦」）。

話を第3段落に戻そう。つづけて、ポツダム宣言を受諾した理由が語られる。まずは、「各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス」と戦局の悪化が挙げられる。しかし、これは受諾した主たる理由ではない。次が最重要箇所である。

すなわち、米国が「殘虐ナル爆弾」（原爆）を使って、「頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至」った。このまま戦争を続ければ、米国は「我カ民族ノ滅亡」だけでなく、「人類ノ文明ヲモ破却」するというのだ。そしてこの認識が、最も有名な一節「堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」へつながる。ここでの天皇はさながら、原爆が引き起こすさらなる惨禍の連鎖を止め世界平和を築くために「終戦」を決意した救世主である。

これが、終戦詔書の主たる目的であった。原爆を逆手に取ることによって、降伏という事実を、戦局の悪化という「敗戦」ではなく、世界平和を築くための積極的な「終戦」に転化したのだ。玉音写真の作為の背景には、このような終戦詔書の目的にもとづくプロパガンダの意図が存在したのである。

もっともこの意図が、国民に伝わったかは別次元の問題だ。「降伏」の語を使わなかったとはいえ、「降

伏」「敗戦」と受け止めた者が多かったであろう。涙した者全員が「やらせ」ではなく、「降伏」「敗戦」と受け止めたがゆえに泣き崩れた者もいただろう。しかし、発信者にプロパガンダの意図があったならば、発信者と受信者の区別を厳密にした記述をすべきである。

とすれば、教育出版や日本文教出版の「ラジオで日本の降伏を国民に伝えました」という記述は誤りである²⁴⁾。玉音放送は「降伏」を伝えていないからだ。一方、東京書籍の玉音写真の解説「ラジオ放送で昭和天皇の声によって戦争の終結が国民に伝えられました」は、「戦争の終結」としているのが正しい。また、脱帽直立の写真なので、放送の瞬間を写した可能性が高い。ただ、この写真は当時の新聞に掲載されていない。脱帽直立では、泣いている写真に比べ、プロパガンダの力が劣ると判断されたからと推測するのは考えすぎか。

いずれにしても、玉音写真を受信者である国民の視点からだけでなく、発信者である天皇・政府・マスコミの意図を捉えられるような学習にせねばならない。玉音放送の発信者側の意図を知らずに「8・15終戦」を刷り込まれているのならば、「聖断」による国体護持、天皇を平和君主として描き出し「敗戦」ではなく「終戦」へと転化したい保守派の論理もまた暗に刷り込まれていることになるからである。

しかし、「8・15終戦」史観は、佐藤氏が指摘するように、保守派の論理だけでなく、進歩派が信じていた「8・15革命」との「背中合わせにもたれあう心地よい」「記憶の55年体制」の上に構築されている²⁵⁾。米谷匡史氏が明らかにしたように、「8・15革命」を唱えた丸山眞男が、国体の呪縛から解放されたのは実際には8月15日ではなく、憲法改正草案要綱が公表された1946年3月6日であった²⁶⁾。「大日本帝国の『実在』よりも戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける²⁷⁾」と述べた丸山の願いを認めることは吝かではないが、少なくとも「8・15革命」は「虚妄」であり認められない。

このように「8・15終戦」史観は、保守派と進歩派が共に創り出したものである。これを克服するためには、発信者側の意図を知ること、そして玉音では平和は開かれなかったこと、すなわち玉音放送以降も戦闘が続いた地域があったことを知ることが不可欠である。

しかし当然、現在の玉音写真を教材とした学習活動はそうなのではない。東京書籍の教師用指導書で

は、玉音写真を用いた学習を、以下のように記している。

◎分節のねらい「多くの犠牲者を出した戦争が、終わったときの人々の様子について、わかったことや考えたことを話し合わせる。」

◎学習・指導の流れ「玉音放送の写真などを調べて、わかったことや考えたことを話し合う。」

◎予想される子どもの反応「やっと戦争が終わった。これから日本はどうなるのだろう。」

◎言語活動の工夫「終戦時の国民の思いを表現する活動を行いたい。教師が玉音放送を読んで、それに対する『国民の一言』という形で、当時の国民の思いを表現させる。また、『学習のまとめ』の時間も使って、その一言にどんな意味があったのかを考える活動を取り入れることで、学級全体でより深めることが可能になる²⁸⁾。」

このように玉音写真は、玉音放送の受信者である人々の様子や心情を考えさせる教材として扱われているにすぎない。もっともこのように写真から、国民が終戦をどう受け止めたかを想像させること自体は重要だが、本実践では本章での検討を踏まえてその先を目指す。

3. 北海道を教材化した「終戦」史学習の先行実践

本章では、北海道を事例とした「終戦」史学習の先行実践を検討する。管見の限りでは、樺太・千島戦を取り上げた、平山裕人氏²⁹⁾と服部剛氏³⁰⁾の2つがある。

平山氏は、小樽市公立小学校教諭でアイヌ史研究者でもある。平山実践は北方領土学習として、樺太・千島戦をその中核に位置づけている。政府見解を「不動の真実」として暗記するのではなく、色々な事実を知らせ、北方領土問題を考え、多様な価値観をもてるようにとのねらいから、樺太・千島戦の経過から戦後の引揚げまで、朝鮮人労働・虐殺にも触れつつ詳細に教材化している。文献を渉猟し優れた実践である。

ただ課題が2つある。第一に、ワークブックにして100頁超あり、時数上、実践が難しいことである。

第二に、「第二次世界大戦は、1945年9月3日に歯舞諸島で終結した」といいながらも、「日本の敗戦（8月15日）の日に、ソ連は千島列島攻略命令を出した」「日本が『負けました』と宣言した日に、ソ連が侵入命令を出すとは、めちゃくちゃとしか言いようがありません」と、あくまで「8・15終戦」を前提としてい

ることである³¹⁾。さらに、ここには問題が2つある。

1つは、「日本が『負けました』と宣言した日」とは対外的な意味であるから、諸外国にポツダム宣言受諾を通告した8月14日とすべきである。

2つは、ソ連が勢力圏拡張のために日ソ中立条約を破棄し対日参戦したことを筆者は決して肯定するつもりはないが、天皇による8月14日のポツダム宣言受諾通知は、ソ連には文字通り「宣言」としか受け取られなかったことを考慮すべきである。8月16日、共産党機関紙「プラウダ」には、アントーノフ参謀総長の名で、次の声明が掲載された。

一、8月14日の天皇による日本降伏の通知は、単に日本の無条件降伏に関する一般的な宣言に過ぎない。〔後略〕

二、天皇が麾下の部隊に戦闘停止と武装解除を命じ、この命令が実際に履行された場合にかぎり、日本軍は降伏したと認められる。

三、以上の理由により、極東ソ連軍の対日攻勢作戦は継続する³²⁾。

これは占領の既成事実を作るための侵攻を正当化する口実にすぎない。しかし実際、「陸海軍人に対する勅語」が出されたのは17日であった。にもかかわらず、樺太・千島戦線を統括する第五方面軍は18・19日に、南樺太死守を掲げ、武装解除を認めず、あくまで自衛戦闘を敢行するよう、現地師団に命令した。武器引き渡し容認に転じたのは21日だった。これによって停戦が実現した³³⁾。停戦が遅れた原因は日本軍の側にもあったのだ。したがって、15日に日本軍が武装解除し降伏したとする中学校・育鵬社と高校・明成社の教科書は誤りである³⁴⁾。この記述は他の教科書にはないが、「8・15終戦」の記述ではそのような誤解を暗にもたせてしまう恐れがある。玉音放送で軍が一斉に武装解除したわけではないことを知る必要がある。

服部氏は、横浜市公立中学校教諭で自由主義史観研究会理事を務める。服部実践は、北方領土教育の前提となる歴史教育として、占守島の戦いを教材化し、「占守島の戦いは、ソ連軍を立ち往生させ、間一髪で北海道の占領を防」いだ誇りある正しい戦いだったと教える³⁵⁾。占守島の戦いで、日本軍が優勢だったことは事実だ³⁶⁾。しかし、スターリンが北海道占領を断念した要因をそれだけに求めることはできない。少なくとも米国との外交上の駆け引きという要因を考えることが不可欠である³⁷⁾。生徒が多面的・多角的に思考・判断できるよう複数の視点から資料を選ぶ必要がある。

4. 授業案と教材

以上の教科書記述と先行実践の課題を踏まえて、本実践は2時間構成とし、第1時は「人々はどうのように「終戦」をむかえたのだろうか？」を学習課題に北海道新聞が伝えた終戦、第2時は「玉音放送で平和は訪れたのかな？」を学習課題に樺太・千島戦を教材化した。

指導案は表1・2を参照していただきたい。授業のイメージがしやすいように、児童の反応には実際の授業での発言をいくつかピックアップして載せた。よって本章では、教材とした資料の概要とねらいを述べる(資料の出典は表中の資料欄を参照)。

資料1は、北海道新聞が掲載した玉音写真である。4人の少年が写っており、前の2人は頭を垂れ、後ろの2人は腕で涙を拭い、泣き崩れ地面に伏している。この写真は玉音放送の歴史的瞬間を写したものととして、戦後、終戦特集の度に掲載されてきた。しかし、これは「やらせ」写真だったことが当事者の証言で判明した。その検証記事が資料2である。遊んでいたら、写真を撮るからとラジオ塔まで連れて行かれ、撮影しながら放送を聞いたが「私には内容が分からなかったのです。なぜ涙を流す格好をするのか理解できないまま、言いなりになってしまった」という。

この写真は教材として優れている。第一に、作為であることを当事者が証言した確実な資料だからである。第二に、児童と同じ札幌の小学生だからである。

まずは、教科書と同様に、受信者の視点から「なぜ少年たちは泣いているのか」という問いで、玉音放送をどう受け止めたのか考えさせる。その上で実際に玉音放送を聴いて、ほとんど意味が分からないと追体験すれば、この少年たちは本当に分かったのかという疑問が生まれるはずだ。そこで、資料2を提示すれば、「やっぱり」という反応と同時に、「なぜ『やらせ』なんてする必要があったのか」と、発信者の視点を考える必要感を自然にもたせることができると考えた。

ただ、これだけだと北海道のみの事例と思いかねないので、次に資料3の朝日新聞(大阪版)が15日当日に掲載した宮城前で土下座している玉音写真を提示する。これも検証記事で、前日14日夕方に東京本社から受け取った電送写真だと判明している³⁸⁾。玉音放送が放送員の解説を含め全体で37分30秒あったことを知った上で、これが発行された時刻に着目すれば、これを掲載することは物理的に不可能であり、これもまた作為であることに自然と気付かせることができ

表 1 第 1 時指導案

学習の展開と子どもの思考の流れ	教師のかかわり
<p>東京大空襲、沖縄戦、原爆投下について学習し、想像を絶する大きな被害が出ており、もはや戦争を続けるのが難しいことを感じている。</p> <p>人々はどうのように「終戦」をむかえたのだろうか？</p> <p>①教科書で終戦の日はいつか確認し、玉音放送によって8月15日に「終戦」となったこと、現在は「終戦の日」として全国戦没者追悼式が行われていることをおさえる。</p> <p>発問「終戦」の日はいつですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月15日 ・昭和天皇がラジオ放送（玉音放送）で伝えた日 →・朝ドラで見たことある ・今は「終戦の日」、全国戦没者追悼式が行われる（日本武道館） →・テレビで見たことある ・甲子園で黙祷しているのを見たことある <p>②北海道新聞に掲載された玉音写真を見て、当時の人々が「終戦」をどう受け止めたか考える。</p> <p>発問「なぜ少年たちは泣いているのだろうか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・負けて悔しい ・お父さんが死んでしまって悲しい ・戦死した人たちに申し訳ない ・やっと終わってうれしい <p>記事には…「悲憤に五体をかきむしられる思ひ」→悲しい・悔しい 「戦死せる父や子や夫に何といつて詫びたらよいか」→申し訳ない</p> <p>③実際に玉音放送を聴くことを通して、写真の少年たちはもちろん、多くの大人も理解するのが難しい内容であったことを体感し、資料1が作為であったことを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語なの!? 全然意味が分からない! ・「残虐ナル爆弾」って聞こえたけど、原爆のことかな ・「共同宣言」はボツダム宣言のことだね ・「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ビ」は聴いたことがあるよ <p>発問「玉音放送を聴いて、写真に写った少年たちは意味が分かったのかな？」</p> <p>資料2の当事者たちの証言を読むと…分からなかった カメラマンの指示で泣くポーズをした</p> <ul style="list-style-type: none"> ・えーっ! 「やらせ」だったの!? ・やっぱり分からなかったんだね ・どうして、「やらせ」なんてする必要があったのかな? ・北海道新聞だけなのかな? 他の新聞はどうなんだろう? <p>④玉音放送がアナウンサーの解説を含め全体で37分30秒あったことを知り、朝日新聞大阪版が8月15日に掲載した玉音写真もまた作為（予定稿）であったことに気付く。</p> <p>発問「涙のお詫びをする民衆」とあるけど、誰に対してなぜお詫びをしているの？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天皇に対して、負けてしまったことをお詫びしている <p>◆玉音放送前後の状況をスライドで知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前日に朝に重大なラジオ放送があると予告 ・朝刊は差し止め ・玉音放送自体は4分37秒しかないが、アナウンサーと情報局総裁の前詞、君が代の奏楽、玉音放送、君が代の奏楽、アナウンサーの解説があった ・全部で37分30秒、終わったのは12時40分頃 <p>発問「玉音放送後、皇居前に写真を撮りに行って大阪に送り、13時に発行することはできるかな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無理 ・じゃあ、この写真は玉音放送の前に撮られたの!? <p>資料4を見ると… ・同じような写真だ ・えっ! 1941年12月9日!?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太平洋戦争が始まった日にも土下座していたの!? ・じゃあ、資料3も事前に撮られた写真だったんだね ・これも「やらせ」なのか ・なんで「やらせ」が必要だったのかな? <p>⑤終戦詔書を読んで、ボツダム宣言受諾を連合国に通告したのは8月14日であったこと、発信者側の意図を捉える。</p> <p>発問「詔書で天皇は、戦争を始めた理由を何と説明しているかな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「帝国ノ自存」「東亜ノ安定」 ・「他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス」 <p>→・満州事変から侵略していたよね? ・言い訳に聞こえる</p> <p>発問「詔書で天皇は、戦争を終わらせると決断した理由を何と説明しているかな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・敵が「残虐ナル爆弾」（原爆）を使って、無実の人をたくさん殺した ・このままだと日本民族だけでなく、人類の文明をも破壊してしまう ・だから、「万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」 <p>→・なんだか自分勝手だな ・天皇がヒーローみたいになっておかしい</p> <p>発問「詔書の日付は、何日ですか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月14日 ・えっ! 15日じゃないの!? <p>⑥北海道新聞の記事に戻り、発信者側の意図から、「やらせ」が行われた理由を捉える。</p> <p>「幼き心にも響く大御心」 「幼い胸は張りさけるばかりの感激で満たされたのであつた」 「明日からは生れ変った気持で今までより一層自分たちのくらしを引き締め……陛下の大御心を安んじ奉らうと誓った」</p> <p>→・天皇が平和を開いたことを強調したかったんだね</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味が分からなかったのに、おかしいな <p>玉音放送で人々は終戦を知らされた。しかし、多くの人々には意味が分からず、アナウンサーの解説が必要だった。にもかかわらず、天皇が平和を開いたことを強調するため、人々がそれに感激して泣いたり土下座したりしている写真が使われた。</p>	<p>8月15日という日付だけでなく、玉音放送を根拠としていることや、現在「終戦の日」として全国戦没者追悼式が行われていることを、教科書から読み取らせる。</p> <p>資料1を提示し発問する。個人で予想させた後、全体で発表させ共有する。 記事を見て、予想が合っているか確認する。記事の内容は難しいので、解説しつつ読み聞かせる。記事にはないが、「うれしい」「ほっとした」と思った人がいたことも伝えフォローする。 聴き取れた言葉をメモしながら、玉音放送を聴くよう指示する。 聴き終わった後、意味が分かったか、聴き取れた言葉があったかを問う。聴き取れた言葉がある場合は、発表させる。 発問後、資料2を配布し読み聞かせる。</p> <p>資料3を提示し発問する。 15日当日は朝刊が差し止めとなり13時に発行されたことを伝える。 天皇にお詫びをしているならば、玉音放送後に撮られたものであるはずだということを確認する。 玉音放送前後の状況をスライドで見せながら説明する。</p> <p>玉音放送後に撮られた写真であるはずだという先ほどの確認を揺さぶり、いつ撮られたのかという疑問をもたせる。 資料4を提示し、宮城前で祈ることやその写真は戦前によくあったことを伝える。</p> <p>資料5を配布し、口語訳をして説明しながら読み聞かせる。先ほど聴き取れた言葉をいかして、戦争を始めた理由と「終戦」を決意した理由を読み取り、発信者側の意図を捉えさせる。</p> <p>詔書の日付を読み取らせ、ボツダム宣言受諾を連合国に通告したのは14日であったこと、玉音放送は前日に録音したものであったことに気付かせる。 北海道新聞の記事を再度提示する。 天皇の「聖断」によって平和が開かれたことに「感激」し、戦後復興への決意を示していることに注目させる。</p> <p>本当に玉音放送で平和になったのかという疑問をもたせて、次時につなげる。</p>
<p>※資料</p> <p>【資料1】写真「ラジオの前に泣き伏す少国民」（「北海道新聞」1945年8月16日朝刊、2面）</p> <p>【資料2】「北海道新聞」1995年10月8日朝刊、30面「歴史的瞬間」作為だった</p> <p>【資料3】写真「国体護持を祈りつつ宮城前広場に涙のお詫びをする民衆」（「朝日新聞（大阪版）」1945年8月15日朝刊、2面）</p> <p>【資料4】写真「宣戦布告の朝宮城前に土下座する赤子達」（「朝日新聞（東京本社版）」1941年12月9日夕刊、4面）</p> <p>【資料5】「大東亜戦争終結ノ詔書」1945年8月14日（川島真・貴志俊彦編『資料で読む世界の8月15日』山川出版社、2008年、p.8）</p>	

る。なお補足のため、資料4の同様のポーズを写した開戦時の写真を提示する。以上の写真資料は、メディア・リテラシーを育成する教材でもある。写真には日付や経緯が記されないため、同じポーズでも発信者がキャプションを変えるだけで様々な文脈で利用可能になってしまうことを理解するには格好の教材である。

こうして「やらせ」は北海道だけでなく各地で行われていたことをおさえ、先ほどの疑問「なぜ『やらせ』なんてする必要があったのか」をさらに高めた上で、資料5の終戦詔書を読み、発信者側の意図を捉える。

第2時の主教材は、樺太・千島戦を体験した元兵士の証言である。資料6は札幌市が小中学生の平和学習で用いるために編集した証言集、資料7は道新が戦後70年特集の連載記事を書籍化したものである。どちらも平易な文章なので、適宜語句を解説したり地名を確認したりしながら読み聞かせれば、子どもたちは、戦いの様子や当事者の思いを想像しながら、樺太・千島戦の概要を理解することができる。また、「玉音放送で平和は訪れたのかな？」と前時からの問いを連続させ、①玉音放送が聴けたかどうか、②終戦の日はいつか、の2点に着目しながら読ませれば、「8・15終戦」史観は自ずと相対化されると考えた。

ただ、これらは下級兵士の証言なので、上で何が起きていたかを捉えさせるために、以下の資料を提示した。資料9では、終戦情報を入手していたにもかかわらず、師団命令を待つため箝口令が敷かれ戦闘が継続されたことを知り、軍にとって上の命令が絶対であることをおさえる。その上で、上層部がどのような命令を出したのか、指導案中に引用した第五方面軍の師団命令や大本営への報告で、玉音放送で軍が一斉に武装解除したわけではないこと、そして、先に引用したアントノフの声明で、ソ連は終戦詔書を「宣言」としか受け取らなかったことを捉えさせることをねらった。

いずれの授業も、導入では民衆の視点の資料を用いて、子どもたちが共感しながら考えられるようにした上で、意外性のある資料を提示し疑問をもたせ、自然と支配者側の論理に迫っていく展開になるようにした。

5. 児童の考え

授業後、小レポート課題を課した。①「終戦」の日はいつと考えるか、②終戦記念日を8月15日と定めることで生じる問題は何か、の2点について、演出された玉音放送や樺太・千島戦に触れながら論じさせた。

『終戦』の日はいつか？」に対する児童の回答は表3のとおりであった。最も多かったのは8月15日(33%)で、次いで9月2日(23%)であったが、8月15日以外との回答を合計すると67%であった。「8・15終戦」史観はおおむね相対化できたといえる。

表3 “「終戦」の日はいつか？”に対する児童の回答

日付	人数(人)	割合(%)
8月14日	6	7%
8月15日	29	33%
8月16日	1	1%
8月18日	2	2%
8月21日	2	2%
8月23日	1	1%
9月2日	20	23%
9月3日	9	10%
9月4日	1	1%
日付なし(8月15日以外)	17	19%
合 計	88	100%

また、8月15日と答えた児童も、単純に8月15日で平和が訪れたという認識をもったわけではない。

〔8月15日と考えた〕理由は、天皇陛下がポツダム宣言を受け入れた事を国民に知らせた日だからです。天皇にとっては14日かもしれませんが、我々国民が知ったのは翌日なので、国民の視点から考えると15日なのではないかと思います。〔終戦記念日を8月15日と定めることで〕生じる問題は、ポツダム宣言を受け入れたのにも関わらず、樺太あるいは北方領土の一部でまだ戦争をやめていなかった事が関係していると思います。“終戦記念日”ではなく、“宣言を受け入れた一応の記念日”であるべきかなと思います。

8月15日を終戦と考えた児童は、多くの国民が「終戦」を知らされた日であることを重視した。しかし、樺太・千島戦について学んだことで、8月15日は終戦記念日ではなく、「宣言を受け入れた一応の記念日」であるべきと、「8・15終戦」を絶対視はしていない。

次に、9月2日とした児童の記述を2つ抜粋する。

①私の考えていた「終戦」とは、日本全国で武器を捨

て、もう二度と戦争はしないという考えをもつことだと思っていたけれど、玉音放送を聞いていない樺太の人は本当か分からない状態になっていたの、それはいけないと思いました。なので、まだ8月15日は武器を捨てていないので、本当の終戦とはいえないと思います。だから、私が考える本当の終戦は9月2日だと思います。理由は、降伏したことを正式に認めてもらったのが、9月2日だからです。

②終戦の日は9月2日だと思います。なぜなら、8月15日は玉音放送を流しただけで、まだ戦争は終わってないからです。しかし、終戦の日は8月15日と一般社会の中に溶けこむ中で、日本国民は勘違い（意見は人それぞれなのであながち間違いではない）をしています。よって、ロシアとの北方領土問題などが生じます。確かに、それだけが原因ではありませんが、根本的な「終戦の日」がずれているなら（日本とロシアで）、話がより複雑になり、解決が困難になります。つまり、「8月15日は天皇が玉音放送をして終戦したかのように思えたが、実は相手国とまだ攻防が続いており、正式に戦争を終えたわけではなかった」ということです。また、「玉音」の演出についてですが、これは率直に申し上げますと、「分かりやすく」放送するべきだと思います。解説が後であるとおっしゃいましたが、ならば天皇が解説のように分かりやすい表現・言葉で「全」国民に伝えるべきです。前文で「全」としたのは2つの理由があります。1つは子どもを含むからです。分かりやすく放送すれば、心に響くでしょう。ましてや、その後に突然写真なんて撮られたら、全然何が何だか分かりません。もう1つは、地方の人も含むからです。北海道等の地方は玉音放送が届いていない場合があります。これが、先ほど申しました「終戦の日」の話に繋がっているわけです。「玉音が届いていなかったから戦争を続けた」と、地方の人に言われても反論できません。これは1つ目より大切だと思います。樺太・千島の戦いについては、まだ戦争が続いていると思いながら戦っているわけです。もし仮に戦いで生き残ったとしても、もっと前に戦争は終わったという一般社会の目を見たらどうでしょう。また亡くなって（戦死）いたら、どんな気持ちで天国に行かなければいけないのでしょうか。

①は、学習前からもっていた「終戦」＝武装解除という認識にもとづいて、樺太・千島戦について学び、8月15日では武装解除されていない事実を知ったことで、武装解除が明記された降伏文書に調印した9月

2日を「終戦」とすべきだと考えたことが分かる。

②は、戦後の「8・15終戦」史観の定着が、ロシアとの北方領土問題を複雑化している根本的な原因だと見抜いた。また、玉音放送の本来取られるべきだったあり方を提案した。歴史を単に非難するのではなく、「こうすればよかったのでは」と批判的に思考していることを評価したい。

以下、8月15日以外と答えた児童の記述について、適宜抜粋しながら、特筆すべき点を述べる。

まず、8月14日である。

「終戦」の日は8月15日なのはおかしいと思います。それは本当に戦争が終わったのは、8月後半だと知ったからです。せめて、本当に戦争が終わった日にしなくても、ポツダム宣言を受け入れたとされる8月14日にすればよいと思いました。

この児童は、本当の終戦は8月後半だと知ったがそれを1日に絞るのが難しかったのだろう。そこで、無条件降伏を記した原文書であるポツダム宣言を受諾した14日を選択したのであって、戦闘が継続したことを無視したわけではない。

次の日付なしだが8月15日以外と答えた児童も、1日に絞ることができなかった結果であろう。

終戦の日は8月15日ということが分かりました。そして、その日は終戦記念日だということも知りました。でも、ぼくはそれはちがうと思いました。なぜなら、日本の一部ではその日が終戦ではなかったからです。樺太ではまず玉音放送を聞かずに戦いは8月22日まで続いていたし、千島でも玉音放送は聞いたけど、その後から戦争が始まって、終わったのは8月20日でした。樺太や千島では玉音放送の後も戦争は続いていました。なので、ぼくは8月15日を終戦記念日にするのはちがうと思いました。『終戦』の日はいつか」とはクローズド・クエスチョンだが、「8・15終戦」史観の相対化というねらいからすれば、むしろ「8・15終戦」が揺さぶられ、1つには絞りかねると思考過程を率直に書き留めたことは、様々な立場から思考し認識を深めたと評価したい。

8月18・21・23日を選んだ児童は、資料6・7・9のうち最も印象に残ったものを選んだ結果である。中でも次の児童の「終戦」に対する認識は注目すべきだ。

終戦は8月23日だと思います。〔中略〕すべてが終わるのは昭和21年で、15日は玉音放送で終戦と言っているだけだと思う。私は、日本に帰ってくる

日が終戦の日だと思っています。帰ってきた人達の無事と亡くなった方々の思いもふくめて、終戦だと思います。

この児童は、集合的記憶としての「終戦」ではなく、一人一人の「終戦」という見方をしている。つまり、歴史を国家の歴史に回収せず、一人一人の人間の歴史として把握しようとしている。地域史と証言を教材化した成果である。

最後に、9月3・4日を選んだ児童は、齒舞群島占領をもって終戦と考えた。

終戦の日は9月3日だと思います。理由は実際に齒舞群島などで日本が武装解除した日だからです。8月15日を終戦記念日にしてしまうと、まだ多くの場所で戦いが続いていたことにより、その人たちが単独（国の命令ではなく自分の意志）で戦ったものとされてしまうと考えました。〔中略〕樺太で、玉音放送のことを軍の上層部は知っていたのに、それを実際に戦っている兵士にだまっていたせいで、より多くの人が犠牲になってしまったことは、国が責任を取るべき問題だと思いました。

齒舞群島が無血占領だったことを落としていなかったのは課題だが、注目すべきは、終戦情報を得ながら箝口令を敷き戦闘を継続したことを、現地軍の責任にのみ帰さず、国の戦争責任として捉えている点である。実務者に責任を押しつけ首脳陣が責任を取らない体質は、日本支配層の今日にまで通底する問題である。本実践は、戦争責任論や戦時・戦後を貫く日本政治の問題を考える上でも示唆を与えるものであったといえる。

6. むすびにかえて

筆者は今年度から本学に赴任し、大学生にも本実践を試みた。結果、教職課程における意義も見られた。

- ①立場によって、日本の「終戦」は変わってくる。また、第二次世界大戦や太平洋戦争を簡単にひとくくりにするのではなく、地域別の終戦を学ばせることで、子どもたちに広義の終戦を伝え、それが事実を教えることにもつながる。結局、日本史（社会）の授業は、教科書また資料集ですら、本当の事実を補うことはできず、教師が独自で資料を集め（大変なのは分かるが…）本当の事実を、子どもたちに伝えるべきである。
- ②8月15日では戦闘が終わっていないこと、どれほど多くの人が知っているだろうか。その後、苦し

んだ人たちにクローズアップするという意味でも、しっかり伝えた方がいいと思う。「教科書に書いてあることだけじゃわからない大切なもの」は誰が、いつ、どのように、誰に対して伝えるのか、しっかり考えるべきだし、今のような一国史的な見方が、地方の人たちなどに対する無理解や心ないバッシングにつながっている気がしてならない。

このように学生たちは、教科書がすべて正確に事実を記しているわけではないことを知り、一人一人の教師が研究し続ける必要性、一国史的な見方を相対化する体系的なカリキュラムを構築することの必要性に気付いた。本実践は、これからの歴史教育を担う学生の意識を育てる意義もあるといえる。

佐藤氏は、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」を二分割して、民俗的伝統の「お盆＝追悼」と政治的記憶の「終戦＝祈念」を政教分離し、8月15日を「戦没者を追悼する日」、9月2日を「平和を祈念する日」として、8月15日のお盆に慰霊供養を行い、9月2日に近隣諸国との歴史的対話をめざすべきだと提唱している³⁹⁾。近隣諸国と友好的な関係を築いていくには、地域史や民衆の視点を重視した多面的・多角的な歴史学習によって一国史的な見方を相対化し、豊かな歴史認識を育むことが不可欠である。本実践は拙いものだが、その小さな一歩である。今後、アジア諸地域での「終戦」の事例を教材化し、より国際的な視点から比較考察できる授業開発を目指したい。

註・引用文献

- 1) 全国戦没者追悼式の実施経緯については、吉田裕「戦争の記憶」『岩波講座 世界歴史』25、岩波書店、1997年）参照。
- 2) 佐藤卓己『増補 八月十五日の神話』（ちくま学芸文庫、2014年、初出2005年）。
- 3) 佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日』（ちくま新書、2007年）。川島真・貴志俊彦編『資料で読む世界の8月15日』（山川出版社、2008年）。
- 4) 前掲註2 佐藤書、p.58。
- 5) 玉音写真を掲載しているのは、小学校は4冊中2冊（東京書籍、日本文教出版）、中学校は8冊中4冊（帝国書院、教育出版、東京書籍、育鵬社）、高校日本史Aは7冊中2冊（実教出版『新日本史A』、山川出版『現代の日本史』）、日本史Bは8冊中1冊（東京書籍）である。
- 6) 前掲註2 佐藤書、pp.58-59。
- 7) 脱帽直立の姿が4冊（小学校・東京書籍、中学校・帝国書院、高校日本史Aの実教出版『新日本史A』、山川出版『現代の日本史』）、正座の後ろ姿が1冊（中

- 学校・東京書籍)、正座で泣いている姿が2冊(小学校・日本文教出版、中学校・教育出版)、宮城前で土下座をしている姿が2冊(中学校・育鵬社、高校日本史B・東京書籍)である。
- 8) 本稿の分析は小学校に限定した。小中高全体の詳細な検討は別稿を期す予定である。
- 9) 占有率は2015年度用(『内外教育』6387、2015年1月16日、p.7)。以下同様。
- 10) 北俊夫ほか『新編新しい社会6年上』(東京書籍、2014年検定済) p.139。
- 11) 石毛直道ほか『社会6』(光村図書、2014年検定済) p.135。
- 12) 前掲註2佐藤書、巻末表6。
- 13) 前掲註10東京書籍教科書、p.137。
- 14) 同上、p.137。
- 15) 有田和正ほか『小学社会6上』(教育出版、2014年検定済) p.131。
- 16) 池野範男ほか『小学社会6年上』(日本文教出版、2014年検定済) p.145。
- 17) 前掲註2佐藤書、pp.148-152 参照。
- 18) ロベール・ギラン『日本人と戦争』(朝日新聞社、1979年) pp.385-387。玉音放送前後の状況については、前掲註2佐藤書、pp.16-20 参照。
- 19) 前掲註2佐藤書、pp.58-59。
- 20) 同上、pp.19-20。
- 21) 同上、序章。
- 22) 終戦の詔書の立案過程や逐語的解釈については、小森陽一『天皇の玉音放送』(朝日文庫、2008年、初出2003年) 第2章、参照。
- 23) 源川真希『総力戦のなかの日本政治』(吉川弘文館、2017年) pp.21-23。
- 24) 玉音放送が降伏・敗戦を伝えたという誤った記述をする教科書は、9月2日の降伏文書調印を記述する教科書でも見られる。たとえば、中学校・学び舎がそうである(安井俊夫ほか『ともに学ぶ人間の歴史』学び舎、2015年検定済、p.253)。
- 25) 前掲註2佐藤書、pp.267-275。
- 26) 米谷匡史「丸山真男と戦後日本」(『情況 第二期』8-1、1997年)。
- 27) 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』(未来社、1964年) p.585。
- 28) 新編新しい社会編集委員会・東京書籍株式会社編集部編『新編新しい社会6上 教師用指導書 研究編』(東京書籍、2015年) p.203。
- 29) 平山裕人『ワークブック アイヌ・北方領土学習にチャレンジ』(明石書店、2005年) 第4章。
- 30) 服部剛「＜授業案＞「占守島の戦い」」(『歴史と教育』153、2011年)。
- 31) 前掲註29平山書、p.188。
- 32) 麻田雅文『日露近代史』(講談社現代新書、2018年) p.425。
- 33) 白木沢旭児「「八・一五」でも終わらなかった北海道の戦争」(前掲註3佐藤・孫書) pp.68-73。
- 34) 伊藤隆ほか『[新編] 新しい日本の歴史』(育鵬社、2015年検定済) p.241。渡部昇一ほか『最新日本史』(明成社、2012年検定済) pp.267-268。
- 35) 前掲註30服部論文、p.9。
- 36) 長谷川毅『暗闘』(中央公論新社、2006年) pp.448-453。
- 37) 北海道占領をめぐる米ソ交渉の攻防については、同上、pp.458-469参照。
- 38) 「朝日新聞」2009年8月12日夕刊、8面「検証・昭和報道第93回 8・15朝刊の謎 6写真の裏書き」。
- 39) 前掲註2佐藤書、p.268。
- 【付記】本稿は、日本社会科教育学会第67回全国研究大会(於・千葉大学、2017年9月17日)での口頭発表「「8・15終戦」史観を相対化する授業—北海道から見る＜日本＞の歴史②」をもとに活字化したものである。

(2018. 8. 3 受理)